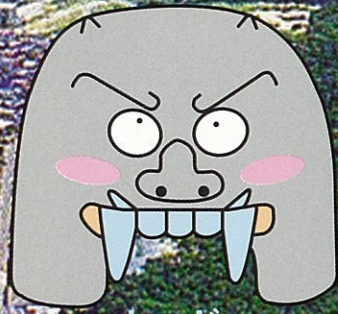


# 幸町小学校3年生の感想から



オニガワ

(瓦は) 大きくて、おもくて、「昔の人は、こういうのを作っていたんだなあ」と、かんしんしました。じっさいにけわしい道のりの所を、歩きました。  
(土の) 黒い所は、「そこでやいたので、黒くなったんだよ」といわれてびっくりしました。

(瓦は) 大きくて、おもかったです。いろいろあって、きれいな形でした。

(瓦を焼いた) かまを見つけるのは、たいへんなさぎょうのことが分かりました。

ほくが、かわらを持った時は、すごく重かったです。

よへいぬまは、とてもでかかった。

1000年前なんてとても昔なのに、それ(瓦や窯跡)がまだあるなんて、すごいなあと思いました。「かわらはねん土をやいてつくったんだよ。」「えっ?!」わたしはやっぱりすごいなあと思いました。(瓦を焼いた窯跡へ)行く道がけわしく、わたしは今にも落ちそうですごくこわかったです。下を見ると谷ぞこでした。かまあとの所はあながあいていて、人がこしかけられるぐらいの大きさでした。先生は「来年は道になるんだって。」と言いました。わたしは、いい時に見られてよかったな、と思いました。帰る時、わたしはそとがかまの所に手をふりました。

昔の人は、よへいぬまで(瓦を)やいていたのに、おどろきました。

かけが(急で)すごかったです。(窯跡の)あなが大きかったです。

のき丸がわらが、花みたいできれいです。

かわら(の模様)がグレープフルーツの形でした。

かわらのしゅるいがたくさんあって、すごいとおもった。



ヨヘエグ

# 語り始めた遺跡たちII

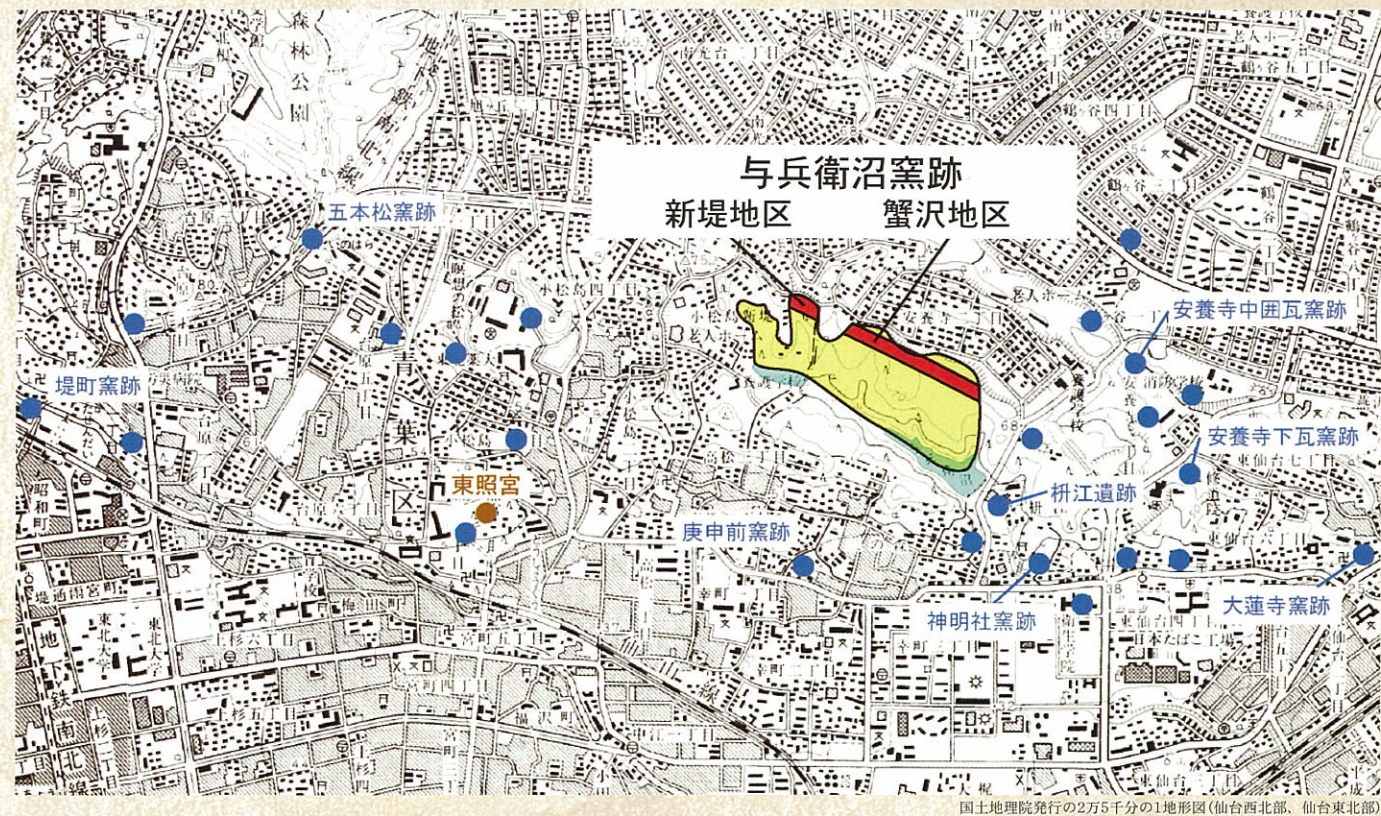
よへいぬま かまあと  
～与兵衛沼窯跡～

守り、伝え、そして生かす



与兵衛沼窯跡新堤地区1号窯(平窯)

# よへえぬまかまあと 与兵衛沼窯跡



## 与兵衛沼窯跡と台原・小田原窯跡群

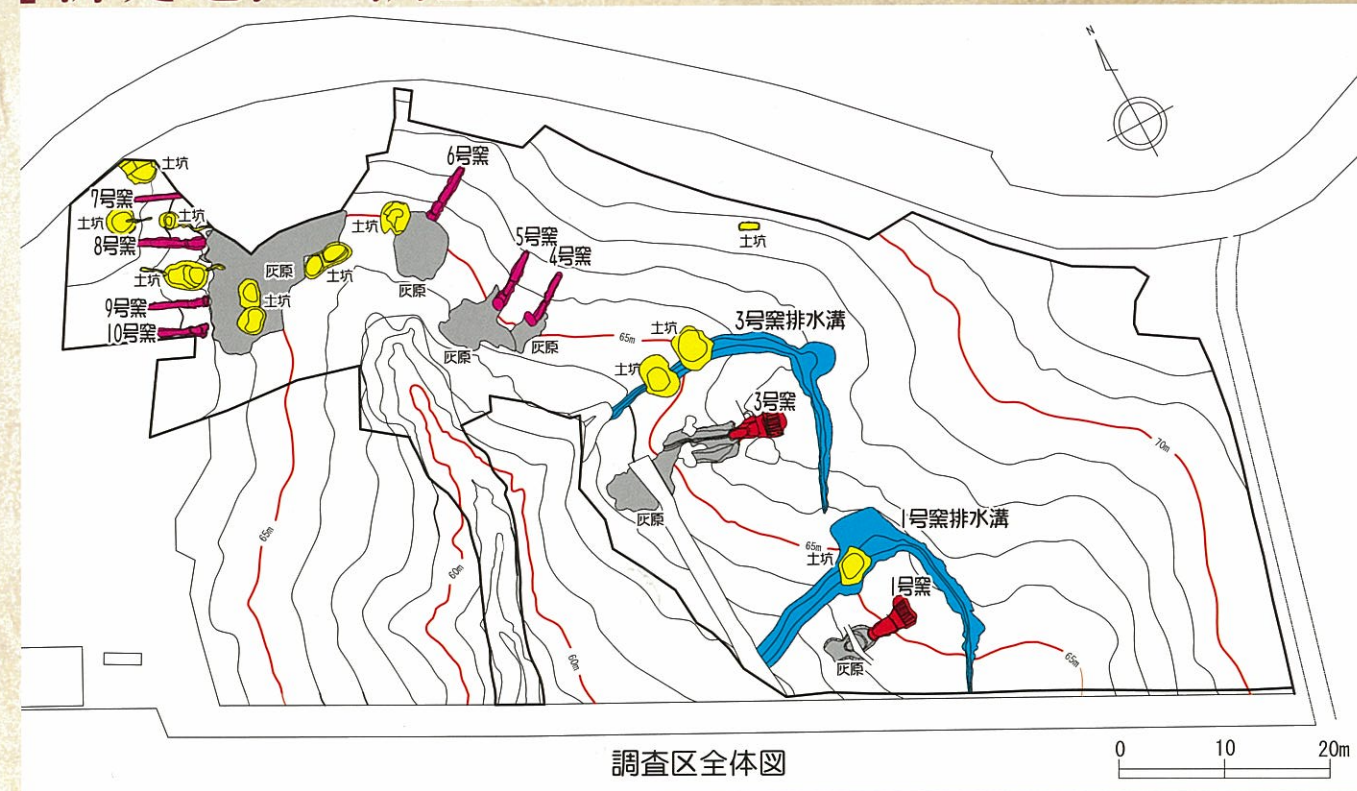
与兵衛沼周辺では、昔から瓦片が発見され、瓦を焼いた窯跡があると見られていました。東西約5kmに広がる地域の中に、30あまりの窯跡群がある台原・小田原窯跡群の一つです。これまで安養寺中団瓦窯跡（半地下式あな窯6基）、安養寺下瓦窯跡（半地下式あな窯19基）、柝江遺跡（半地下式あな窯6基と工房跡）、庚申前窯跡（半地下式あな窯5基）や、神明社窯跡（ロストル式平窯など）が発掘調査されています。

今回発掘調査した与兵衛沼窯跡の新堤地区は、仙台市が建設している都市計画道路の建設地内でした。焼けた土や大量の瓦が発見され、奈良時代（8世紀・1250年前）から平安時代（9世紀・1100年前）にかけて作られた瓦であることがわかりました。



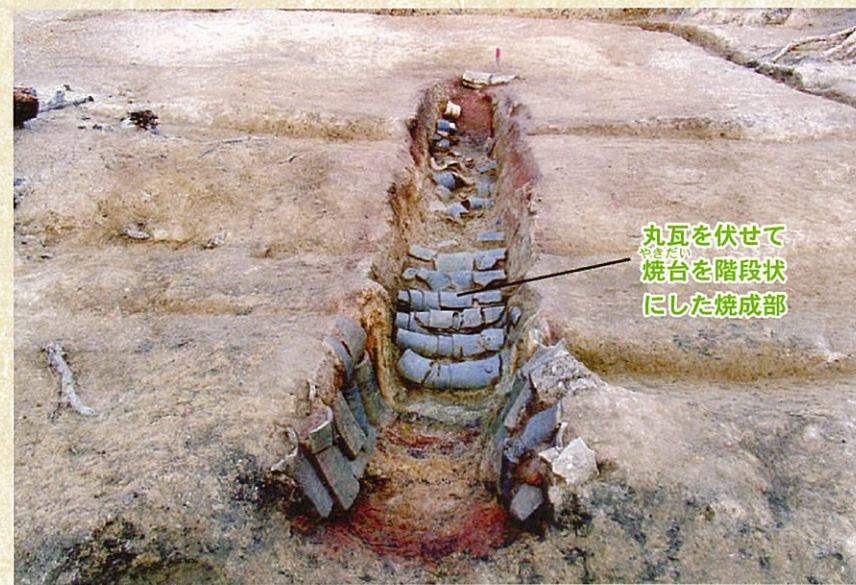
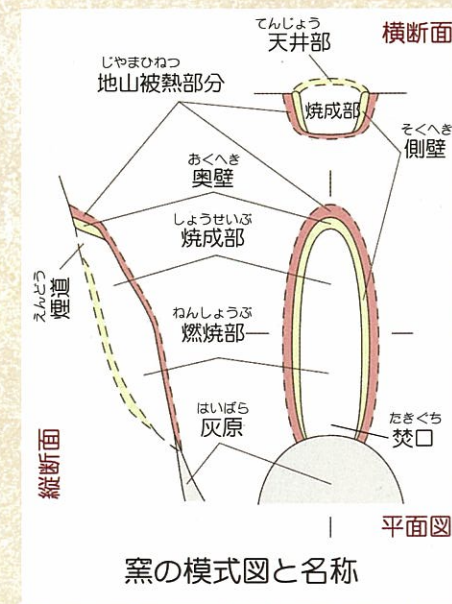
調査以前の状況（平成17年）

## 新堤地区の調査

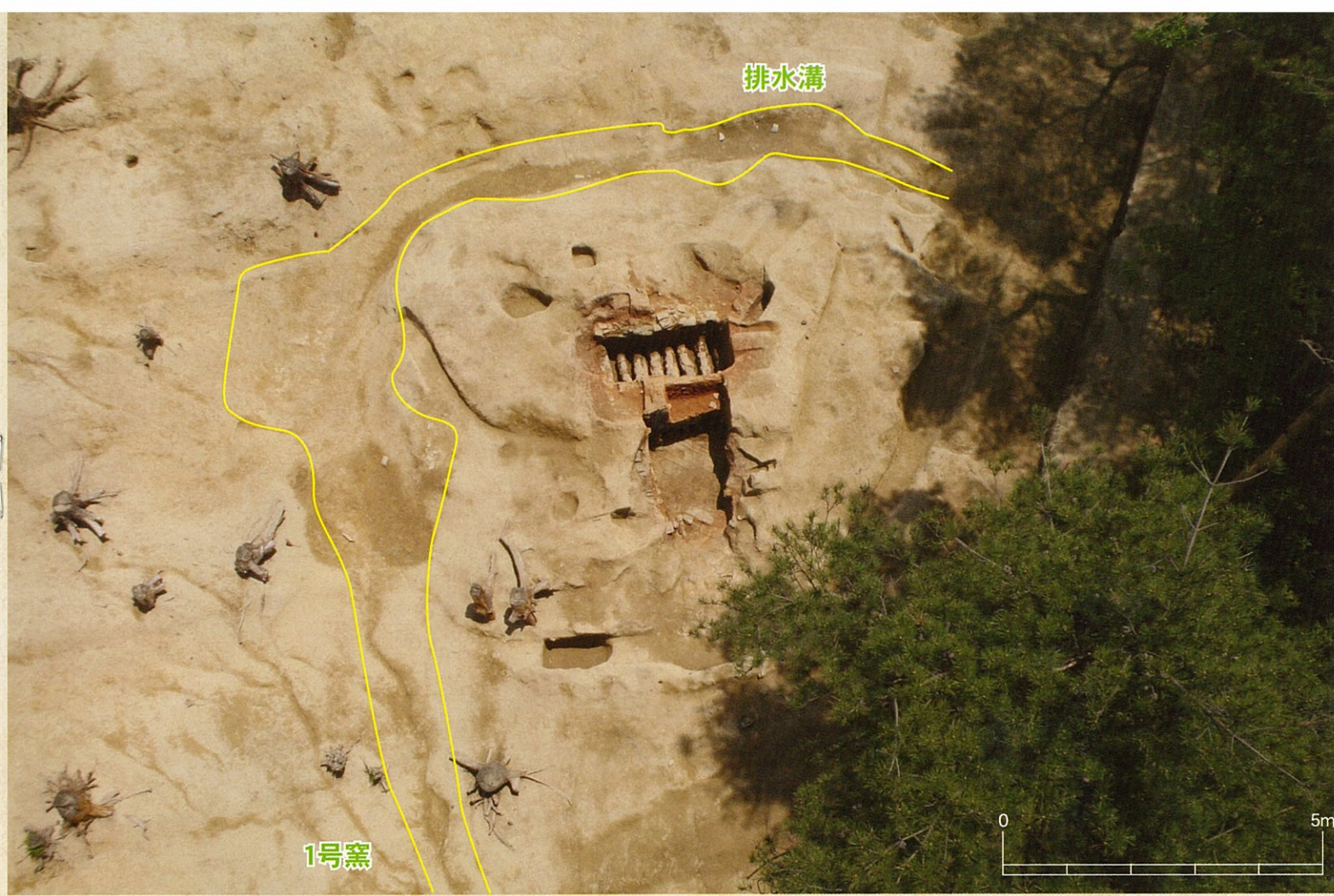


平成18年度から始まった与兵衛沼窯跡新堤地区の調査では、平窯2基とあな窯7基が発見されました。これらの窯は瓦を焼くためのもので、そこで焼かれた瓦は文様や作り方から多賀城や陸奥国分寺、国分尼寺の建物の屋根に使われたと考えられます。

瓦を焼いた窯は、丘陵の斜面に沿って掘られた「あな窯」と、窯の底がほぼ水平な「平窯」の2種類があります。あな窯はトンネル状に掘り抜く「地下式」と天井をかける「半地下式」があります。台原・小田原窯跡群の多くは、下のような細長いあな窯です。



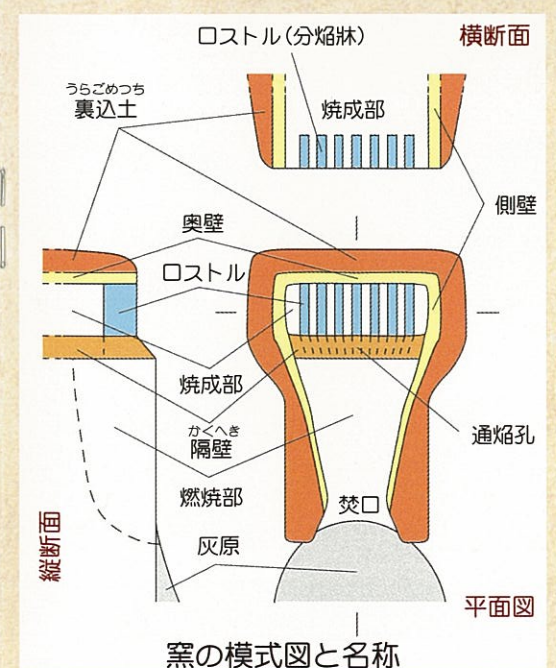
6号窯



# 平窯

新堤地区で発見した平窯（1号、3号窯）は、丘陵の緩やかな斜面を水平に掘り造られています。燃焼部（燃料を燃やす場所）や焼成部（瓦を焼き上げる場所）の壁は瓦を積み上げ、その周りに排水用の溝が巡っていました。

壁の構築に用いられた瓦の年代から、貞観11年(869)に起きた陸奥国大地震により被害を受けた建物の復興のために造られた<sup>かわらがま</sup>瓦窯であることが、明らかになりました。



燃焼部の底には炎の通り道となる<sup>えんどう</sup>焰道を形作るための、<sup>ぶんえんしょう</sup>ロストルと呼ばれる<sup>うねじょう</sup>分焰床（数条の畝状の高まり）が造られています。燃焼部で燃え上がった炎は、燃焼部と焼成部の間にある通炎孔を通して焼成部に導かれます。ロストル式の平窯は内部の温度が均一に保てるので、大量の瓦を短時間で焼くことができます。

瓦は焼成室の上から入れて並べ、その後天井を造ります。瓦が焼きあがったら、天井を壊して取り出します。

新堤地区で発見された平窯は、南東に位置する神明社窯跡に次ぐ東北地方で2例目の発見ですが、窯の完成された形を示し、構造がよくわかる貴重なものです。

## 発見された瓦

与兵衛沼窯跡新堤地区からは、大量の瓦が出土しています。そのほとんどは丸瓦や平瓦ですが、軒先を飾る蓮華の花をデザインした軒丸瓦や、それと組み合わせる軒平瓦も少量含まれています。この他に屋根の棟の端に使われる鬼瓦や棟平瓦など特殊な瓦もありました。

### 瓦の種類と使い方



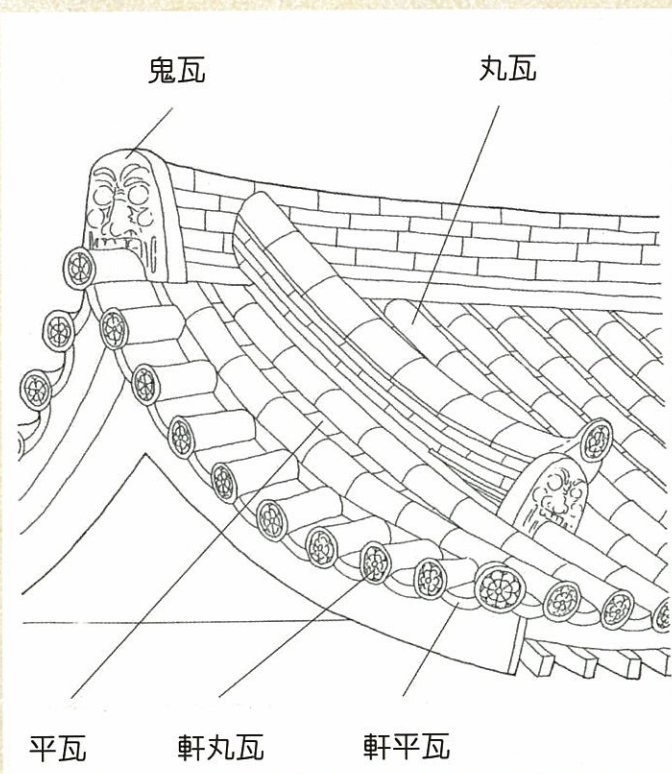
鬼瓦



丸瓦



平瓦



平瓦

軒丸瓦

軒平瓦



重弧文軒平瓦



棟平瓦

(均整唐草文と波状文が描かれている)



軒丸瓦  
(重弁蓮華文)



軒丸瓦  
(重弁蓮華文)



軒丸瓦  
(細弁蓮華文)

## 棟平瓦

3号窯からは「棟平瓦」と呼ばれる珍しい瓦が見つっています。この瓦は朝鮮半島の統一新羅時代(668~935年)の宮殿や寺院跡から出土するものとよく似ており、大陸との交流を示す貴重な遺物です。平安時代の「日本三代実録」という書物には、貞観12年(870)に瓦作りの得意な新羅人を陸奥国に送ったという記録があり、東北地方と朝鮮半島の関わりを見出せます。

## 蟹沢地区の調査

平成19年度の与兵衛沼窯跡蟹沢地区の調査では、東地点と西地点からあな窯が各9基、計18基が発見されました。いずれも斜面の傾斜を利用した半地下式あな窯です。

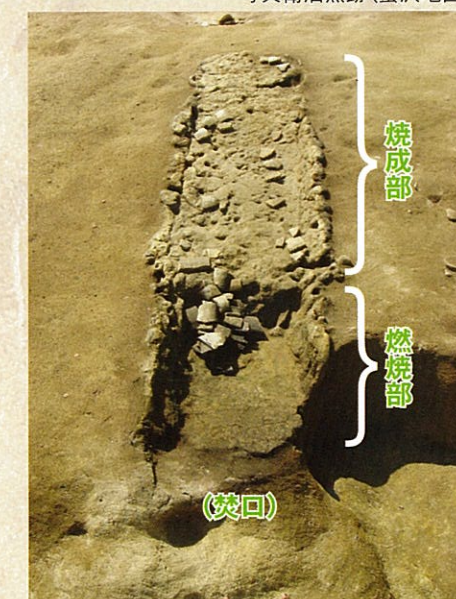
東地点からは奈良時代後半(8世紀後半・1250年前)の瓦専用の窯跡が見つかり、軒丸瓦や平瓦、丸瓦が出土しています。

西地点からは奈良時代末から平安時代初めにかけての瓦や須恵器、硯などを焼いた窯跡が発見されています。窯の天井部が部分的に残るものや、あな窯の構造がよくわかる残りのよいものもありました。

窯は山の斜面や水のある谷、燃料の薪となる森、材料となる粘土などの条件が整う場所に造られます。



与兵衛沼窯跡(蟹沢地区)



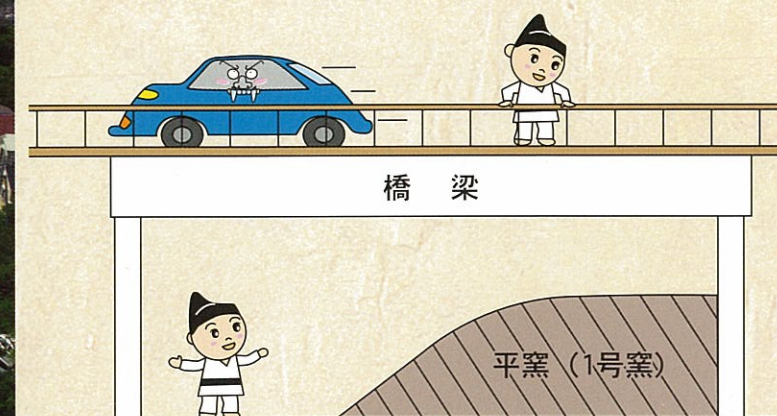
東地点13号窯

## 平窯の保存

新堤地区の2基の平窯は、橋を架けることにより保存されることになりました。またあな窯についても道路の際に擁壁を設置して保存されます。仙台市はこれらの窯跡群の国史跡指定をめざして、今後も遺跡内の調査を続けていきます。歴史公園として窯跡など特色のある野外展示を検討していきます。



調査区全景(東から)



窯と橋梁の位置関係イメージ